

(別紙2)

## 論文審査の結果の要旨

論文提出者氏名 ヒル、ラクエル・アン＝ルイズ

ラクエル・アン＝ルイズ・ヒル氏の博士学位請求論文「<第三の空間>への旅 ジャネット・フレームと大庭みな子の作品におけるディスプレイメントの修辞学」は、ニュージーランドの現代作家ジャネット・フレームの三つの作品と、大庭みな子の主要長編小説とを、地理的のみならず、さまざまなナラティブ的ディスプレイメントという分析概念で比較考察した研究である。直接影響関係のない二人の女性作家は、ともに国家や歴史の枠の外にしようとする新しい空間を模索する点で強い共通点を持ち、本論文はその点に注目し、対比研究としてテキストを精緻に読み解いた労作である。

ヒル論文の特色は、これまで全く比較研究されることのなかったフレームと大庭という地域も言語も異なる作家間にある問題意識の共有、アイデンティティの揺らぎに着目した点にある。ディスプレイメントは通常、移動、居場所のなさといった場所に関する喪失感を意味するが、フレームと大庭の場合、そういった地理的なディスプレイメント以外に時間的、精神的、文化的、ナラティブ的ともいえるディスプレイメントが作品のなかに表現される。ヒル氏はまず両作家のすべてのテキストを丁寧に読み、その上でフレームの自伝を含む四作品、大庭の三作品を選び、従来なされることのなかった解釈を試み、それぞれの作品に独自の視点を提供した。その結果、フレーム研究としても大庭論としても従来の研究を一步進める貢献をなしているといえよう。

本論文は問題提起や分析概念を説明する序章に続き、大きく二部に分かれており、第一部ではフレーム、第二部では大庭を扱っている。以下、構成にしたがって内容を紹介する。

まず、序章では、日本ではまだあまり知られていないがニュージーランドでは極めて重要な作家であり、ノーベル賞候補でもあって昨年亡くなったジャネット・フレームの『カルパチア山脈』と、大庭みな子の『浦島草』において、主人公がともに世界の反対側への旅に出かけ、真正(オーセンティック)なアイデンティティを探求するというテーマを紹介した上で、先行研究を整理する。その上で二人の作家を比較して論じることにより、これまでフェミニスト批評が主流であった大庭作品を、フレーム論に使われるポストコロナ批評が問題とする「場所」という面から研究する可能性をも示唆した。

第一部第一章ではジャネット・フレームの自伝三部作『現在(イズ＝ランド)の国へ』(1982)、『天使が私の食卓に』(1984)、『鏡の街からの公使』(1985)を取り上げ、冒頭に出てくる<第三の場>という本論文のキーワードとなる言葉の意味を探る。自伝は旧イギリス植民地の欧米系移住者であるニュージーランド人(パケハ)の複雑な文化的アイデンティティを問題にしているが、ここではさらに作者フレームの語りの構造を捉え、ナラテ

ィヴ的ディスプレイメントを論じる。

続く第二章では、中心（イギリス）／周縁（ニュージーランド）に着目しつつ長編小説『アルファベットの縁』（1962）を考察する。「アルファベット」が言語を表し、「縁」が場所を意味するように、この小説は、場所と言語を通してパケハのナショナル・アイデンティティへの挑戦をおこなっていると指摘する。

小説『包囲の状態』（1966）を扱う第三章は、ディスプレイメントを起こす南島から北島への国内移住の過程で主人公が遭遇する見慣れぬ場所や風景が彼女の主体性にどのように揺さぶりをかけているかを検討する。作品中に際立つ風景描写を詳細に読み、文化的帰属意識について独自の解釈をおこなった。

第四章では、ヒル氏がフレイムの代表作と考える『カルパチア山脈』（1988 自伝以外のフレイムの上記の小説はこの作品も含めすべて邦訳はない）における地理的、時間的、文化的、言語的、ナラティブ的ディスプレイメントに注目する。「記憶の花」というマオリの伝説を確認するためにニュージーランドの小さな町を訪れたアメリカ女性は、土地の住民のほとんどが自分たちを異邦人と感じていることに衝撃を受ける。この章では土着性（インディジェニティ）と真正性（オーセンティシティ）を追求することとは何であるかが鋭く論じられている。

第二部では大庭みな子の文学世界における祖国、故郷、国家について考察するが、フレイムの「第三の場」を連想させる「第三の世界」（『浦島草』）が重要な手がかりとなる。第一章では大庭の自伝的作品『舞へ舞へ蝸牛』（1984）を取り上げる。原爆投下直後の広島体験による戦争のトラウマと、結婚後10年にわたるアメリカ生活というディスプレイメントを重視し、従来の大庭研究がデビュー作「三匹の蟹」以来構築してきたフェミニスト批評的枠組みからテクストを解放し、新しい文脈で大庭文学を捉えなおそうとした。

次いで第二章では『がらくた博物館』（1975）における異境空間に目を向ける。作品の舞台はアラスカを思わせる設定にはなっているが、本質的には特定の場所を越えるヘテロピアと考え、さまざまな人種的背景を持つ登場人物を通して、固定したものではない、ディスプレイメントによるアイデンティティを考察する。

さらに第三章はヒル氏が大庭の作品中最も重要とみる『浦島草』（1977）を時間、文化、記憶などの重層的なディスプレイメントの観点から詳細に分析する。また11年間のアメリカ生活を切り上げて帰国した女性が体験する故郷日本と記憶の問題を、一種の魔術的リアリズムとして読む可能性を提示する。

最後に、第一部と第二部での分析を踏まえて終章では、フレイムと大庭の諸作品におけるディスプレイメントの修辞学が、個人の主体性の形成における場所や風景の果たす役割を思考するための空間を開くのではないかとヒル氏は結論づけた。こうしてニュージーランドと日本という離れた場所で独自の作家活動をおこなった二人の作品世界は、思いもかけない関係性をみせることになる。ヒル論文の対比研究は新たな比較文学の可能性を示すものとも考えられる。

以上のように要約されるヒル氏の論文に対し、審査委員から次のようなコメントや評価、批判がなされた。まず評価すべき点としてはテキストを丹念に読むことにより、これまでの研究に再考を促す重要な指摘をおこなったことであろう。その上で複数の委員が疑問点として挙げたのは、タイトルにもある〈第三の空間〉の意味である。確かにフレームも大庭もそれぞれ「第三の場」、「第三の世界」という表現を作品中に使っているし、ヒル氏もホミ・バーバの「第三の空間」(サード・スペース)、エドワード・ソジャの「第三空間」を引用しつつ説明を加えているけれども、なお本論文で設定されているこの空間がいかなるものであるのか説得力に欠けているのではないか。このこととも関係するが、いくつかの興味深い発見のあとの論述にもう少し深まりがほしかったという注文もあった。第一部ではニュージーランドの歴史的背景への考察がもっとあるべきであろう。また第二部第三章で述べられている魔術的リアリズムは、ここにはあてはまらないのではないかという意見もあった。さらに、これは対比研究そのものの持つ難しさとも関係するが、この二人の作家を比較して論じることの必然性に関する質問も出た。

その他細かい点ではあるが、日本語表記の問題点、誤字等について指摘がなされた。これらは今後も日本語を母語としない著者が注意すべき点ではあるが、ヒル氏の論文の価値を損なうものではないことが認められた。

したがって、本審査委員会は、ここにラクエル・ヒル氏に対し博士(学術)の学位を授与するにふさわしいものと認定する。